

## 復命書

2011年8月31日

新政会 代表  
望月 厚司 様

議員名 佐藤成子

下記のとおり、政務調査費による視察を実施したので、ご報告します。

1 日 時	2011年8月22日(月)～23日(火)	
2 視 察 先	(1) 都 市 名 視 察 先 施 設 等	東日本大震災LM地議連視察 岩手県陸前高田市・大船渡市
	(2) 対 応 者	現地の市議会議員 大船渡市農林水産部長兼魚市場建設推進室長 金野博史氏 遠野市長 本田敏秋氏
3 目 的	まさに百聞は一見にしかずだと奥州市の市議会議員の企画で視察が決まり、全国の加盟議員が結集。被害のひどい2市の5カ月の現状を視察する。現地の市議会議員が、どんなことが出来たのか伺う。後方支援の遠野市の市長からその実情を伺う。建設中だった魚市場の話と今後の計画を担当当局 から伺う。	
4 内 容	(調査事項・調査結果を具体的に) 水沢江刺駅からバスで被災地へ向かう。バスの中で、大船渡で自らも被災、避難所生活をへて、今は仮設に住んでいる元議員の平山仁さんの話を伺う。陸前高田市では、10人に一人は亡くなった。5か月たってもまだ水が引かない野球場が沼状態になっている。ここには大型スーパー・コメリがあったところです。あの雇用促進住宅の4階まで津波が来たと言います。地盤も下がっているし、国道がなくなってしまった。今海の下に沈んだ網を引き揚げている。あの小学校では、高台に逃げた生徒は助かったが死亡行方不明者を多く出したところです。悲惨な話が続く。目の前は、がれきは片づけられ、あちこちに山になって積まれている。本当にここに街があったのかと疑う状態だ。ここが中心街でしたの言葉が何んとも虚しい。	

大船渡の魚市場へ。金野博史大船渡市農林水産部長兼魚市場建設推進室長の説明を受ける。新魚市場が、あと1ヶ月ほどで完成する矢先に被災。旧魚市場の屋根を超えて波が来た。第2波が大きかった。20波は来たのではないかと80センチほど地盤沈下。県との協働事業で、100億かけての建設途中。水産加工業が主力産業。3000隻の9割が流出。早く普及復興へ向かわなければと思う。この日、被災後初の秋刀魚の水揚げがありました。

平山仁さんは、その後、避難所の自治会長になった。避難所の実態と課題をまとめている。震災当日、大船渡中学校避難所は、道路が寸断し孤立した。そのため、市役所職員は当日来られなかった。本来の避難所は小学校だったが、浸水していて行けなかった。受け入れは先生たちが行った。当日、すべてのライフラインはストップし、もちろん食事などなかった。多い時は472名の避難者がいた。被災から10日前後まで、毛布が足りない、食事はおにぎり1個、安否確認のピーク、すべての物資が足りない、そんな中で、自治会が立ちあがった。避難所の運営を始める。シェルターテントの設置、子供、ペットのスペース確保、学習スペースも。警察が24時間在中。仕事の割り振りを行う。班割りをやり、役割分担を行う。とにかく寒かった。毎日インスタント食品では健康を害する。支援物資は全国から届くが、必要な物が無かったりする。などなど、生の現実の様子を聴かせていただいた。最後に、議員へ、災害対策本部に議員は議長と言えども入っていないため議会や議員の災害時の活動が見えにくい。避難所の運営などに積極的にかかわるべきだ。有事の際、何を行うのか事前に考えておくべきだとアドバイスを頂く。

#### 本田敏秋 遠野市長

遠野市は後方支援の拠点。地震発生後の14分後には、運動公園を後方支援の拠点として開放。市消防本部が照明器具などを用意し受け入れ体制を整えた。自衛隊1800人が集結。岩手県警、秋田県警も到着、沿岸部へ向かう体制が整えられた。その後も、消防・行政・医療・ボランティアなど各方面の支援チーム、ライフライン復旧や報道関係者など、震災対応の一大拠点となった。この背景には、三陸地域震災後方支援拠点施設整備推進協議会の取り組みがあったが、本田市長のリーダーシップあってのことだ。ここには、静岡県も現地支援本部を設置し常時20人程の職員が支援に入っていた。後方支援のきっかけ、本格化は、12日

	<p>の未明、大槌高校に500人が避難しているが水も食料もないとの情報が1人の男性が届けられてからだ。遠野市は、内陸部と沿岸部を結ぶ交通の要衝。本田市長は、岩手県職員時代、消防防災課長として、阪神淡路震災後の防災計画の全面見直しに携わっている。市長就任後、先の協議会を設置。今後の課題は、《医職住》保健・医療・雇用・住居の確保が必要だ。今回初動対応は、県よりもはるかに早く、確実な情報のもと対応できた。救援物資が県の施設に山積みだったことや、行政機能が失われた沿岸部へのもう少し積極的県の支援があれば良かったなど、県と市町村との連携が必要だのではないか。市庁舎倒壊で、テントを張ってのリーダーシップの発揮は素晴らしい。気の長い支援が必要だ。</p>
<p>5 成果・市政への反映等</p>	<p>まさに、百聞は一見に如かず。宮城県名取市、仙台市、塩釜市、東松島市。岩手県大船渡市、陸前高田市など、それぞれに、合わせて4回程、東北へ出かけた。始め、あの美しかった故郷の変わりように、言葉を失った。5か月経って、海に出かける姿や、プレハブのコンビニが出来たり、少しづつ前に進んでいる感じだ。伺った《避難所の実態と課題》は、今後の災害防災計画の復興の項に、多いに参考になる。現場の判断が命を助ける。制度はこの際目をつぶるくらいの判断が必要。“バイキング形式”の物資配給の仕方。避難者が自分の必要な物を20品目まで選んで持ち帰れる仕組みに300から500人が連日訪れたという。足りない物資は日々変化する。遠野まごころネットの活躍が目立つ。現地の要望を把握し、派遣地域人数、作業内容などを振り分けている。この動きが大切だと痛感。それぞれの自治体が、身の丈に合った支援を続けることが大事だと市長の言葉が心に残った。また、この視察を企画した奥州市議の佐藤邦夫さんたちは“東日本大震災野菜ボランティア募金”を始めた。被災して仮設住宅で生活する人たちに新鮮な野菜を無料で届けるプロジェクトを立ち上げたのだ。さまざまな議員の活動支援の仕方があるが、より具体的で素晴らしいと思う。出来る事を自然体で、気長に続けていきたいと思う。明日は我が身かもしれない事をよくよく自覚したいものだ。それにしても、いざという時は行政に頼りがち。自助・共助・公助。日常の意識の定着を更に図るべきではないか。</p>